学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	池田　來未 比較社会文化学専攻2019年度生	論文題目	〈完遂〉を表す複合動詞の通時的研究

審査委員	主　　査:	竹村　明日香　准教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否　：　否
	副　　査:	浅田　徹　教授		「否」の場合の理由
	副　　査:	野口　徹　教授		□ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	伊藤　さとみ　教授		□ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	川瀬　卓　准教授 (白百合女子大学)		□ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博　士	人文科学		■ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Japanese Linguistics)			□ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学 位 論 文 審 査 ・ 内 容 の 要 旨

本論文は、特定の動作や行為を継続した後にやり終えたことを表す複合動詞について通時的に調査し、それらがどのような過程を経て〈完遂〉の用法を獲得するようになったのかを明らかにしたものである。論文は全7章の構成であり、序章の後に第2章で「～ヌク(抜)」、第3章で「～トオス(通)」、第4章で「～ハツ(果)」、第5章で「～オワル(終)」について考察した後、第6章で各複合動詞の歴史的な競合関係を描き出し、第7章で今後の課題について述べている。

序章の後、まず第2章では「～ヌク」の歴史的展開が論じられる。「～ヌク」は、上代には本動詞「抜く」の語彙的意味を多分に残した〈貫通〉という用法しか存在しなかったが、中古には〈抜出〉、中世には〈選抜〉や〈抜駆〉といった人物間の優位性を示す用法が現れ始め、近世には時間的継続と目標の達成を示す〈貫徹〉や程度の甚だしさを表す〈極度〉という用法が現れることを指摘する。現代語の「～ヌク」に結果を伴うという意味が付与される理由については、〈抜駆〉が相手より抜きん出て優位性を得るという意味を持っていたことから、〈抜駆〉から派生した〈貫徹〉も成果を伴うという特徴を持つようになったという、歴史的変遷と現代語に残存する用法を結び付けた考察も行っている。

第3章では「～トオス」について考察し、中古までは〈貫通〉〈通過(行程)〉〈通過(視線)〉といった物理的な移動を表す用法が多かったが、近世以降は〈一貫継続〉という〈完遂〉を表す用法が多くなったことを用例調査から明らかにし、語彙的複合動詞から統語的複合動詞への変遷の過程を裏付けている。

第4章では「～ハツ」を取り上げ、〈状態成立〉は上代から近代まで存在するのに対し、〈動作完結〉は中古以降に減少すること、そしてそれと対応するように〈極限状態〉は近世から全用法の3割を占めるほど増加することを指摘した。「～キル(切)」や薩隅方言の「～トル」と対照させ、〈完遂〉から程度性を表す〈極限状態〉が派生した可能性が高いことも指摘している。

第5章では「～オワル」を扱い、近代における「～ハツ」から「～オワル」への大きな転換には、日本語における文体の変化が関わっており、明治普通文の普及が近代における「～オワル」の拡大に一役買ったことを指摘する。

第6章では、ここまでに扱った複合動詞の歴史的な競合関係について考察し、「～トオス」は中古に、「～ヌク」は近世に〈完遂〉用法を確立させるものの、特殊な意味でしか用いられなかったことから競合関係は生じず、「～ハツ」は〈極限状態〉が近世に興隆してきたことから〈完遂〉用法が衰退し、近代において文体変化とともに「～オワル」に取って代わられたことを指摘する。

複合動詞の通時的研究では、従来、文脈に依存して分析するものが多くある。しかし本論文では、前項動詞の種別に基づいて用法分類を行うという客観性の高い分析法を採っており、文法研究の態度として望ましいものと言える。綿密な用例採集を行い、語彙的用法から統語的用法へと変化する過程に合理的な説明を与えた点も高く評価できる。ただし、〈完遂〉を表す複合動詞の中でもなぜこれらの動詞を選んだのかという点や、本論文で採用したもの以外の動詞分類を考慮しなかった点について説明不足であるなど、問題点はある。しかし現代語に残っている用法について歴史的な過程から妥当性の高い説明を与えたり、方言にある類例にも言及するなど、細かな点への目配りも評価できる。

第1回審査委員会は12月26日に開催された。審査では、コーパスデータをもとにして説得力の高い論述がなされている点が評価されたものの、近年の重要な先行研究を見逃している点や、他動詞・自動詞のペアになるものの一方しか扱っていない点、動詞の競合関係について説明が不十分である点、文語化して現代語に残存している例についての言及が足りない点などが問題点として挙げられた。申請者はそれらに対し誠実に対応し、1月末に修正版を提出した。その修正版に対して第2回目の審査が行われ、公開発表会・最終審査に進んで良い旨の決定が2月10日に下された。公開発表会は2月17日に行われ、申請者は博士論文の概要を明快に説明し、聴衆や審査員からの質問に対しても的確な回答を行った。以上により、最終審査会にて、本論文は、博士(人文科学)、Ph. D. in Japanese Linguisticsにふさわしいものであるとの判断が全員一致の合意により下された。